

故宮博物院蔵満漢合璧『鳥譜』について

柳澤 明

目次

1. はじめに——本『鳥譜』の概要——
2. 成立過程
3. 本『鳥譜』の価値
4. 結び

1. はじめに——本『鳥譜』の概要——

1-1. 所蔵状況と外形

本稿で紹介・考察の対象とする『鳥譜』は、台北と北京の故宮博物院に分蔵される計 12 冊、361 幅のものである。このうち、台北所蔵分の 4 冊 120 幅については、1997 年に『故宮鳥譜』と題して写真版が刊行され、一部は絵葉書や切手としても販売されているので、一般にもある程度知られていると思われる⁽¹⁾。本『鳥譜』の体裁について、譚怡令氏による同書の解説に基づいて概略を示すと、各冊 30 開で⁽²⁾、それぞれ図と満漢合璧の譜文からなる。図・譜文とも絹本で、サイズは縦 41.3cm × 横 43.9cm である。第一冊冒頭に捺された「重華宮鑑蔵宝」から、もと重華宮に蔵されていたことがわかる。筆者は 2004 年 3 月に台北故宮博物院を訪れ、関係各位のご好意によって第一冊の原本を実見することができたので、その際に得た情報に基づいて若干の補足を加えると、譜文と図は一枚の大きな台紙の左右に貼り付けられ、画面が内側になるように折られている。元来は胡蝶装にされていたらしく、台紙背面に糊の痕が見られるが、現在は切り離されている。こうした台紙が 30 枚ずつ、2 枚の木板に挟んだ形で保管されており、木板の表面には『鳥譜 第一冊』と彫り込まれている。これは清代以来のものだという。

(1) 『故宮鳥譜』(全 4 冊) 国立故宮博物院, 1997. なお、中華民国野鳥学会ホームページの「故宮鳥類文物特展」でも、本『鳥譜』の図の一部を見ることができる (<http://www.bird.org.tw/ebird/e/c-index.htm>)。

(2) 各冊 30 開 (30 幅) ならば 12 冊で計 360 幅となるはずであるが、実際には 361 幅あるのは、2-1 で詳述する『石渠宝笈続編』の記事によれば、乾隆 39 年に「額摩鳥」が増補されたからである。

一方、北京に残りの8冊が現存しているか否かについては、その時点では確たる情報がなかったが、帰国後、譚怡令氏から、本『鳥譜』の一部が北京故宫博物院絵画館で展示されているとの消息を得て、5月初めに実見することができた。しかし、8冊全体にわたって詳細に調査するには至らなかったため、以下本稿では、主として台北所蔵の4冊について考察を進めることにしたい。

1-2. 内容

まず図に関していうと、ほとんどの図は、一羽～数羽の鳥が、樹上または地上に静止した姿勢で描かれており、羽を広げた構図、飛翔中の構図はほとんどない。二羽の例が目立つが、必ずしも雌雄とは限らない。雌雄が別図になっている場合もある（たとえば第三冊の「北百舌」と「雌北百舌」）。なお、実際には同種の鳥の雌雄であるが、別種として描かれている例も少なくない。描き方は細密で写実的であるが、種類によって出来不出来の差があって、何の鳥か判定に苦しむものも散見する。しかし、一見して種名同定が可能なものも多く、総じていえばかなり正確に描かれている。このことと、鳥の各部の色彩に対する譜文の記述がきわめて詳細であることを考え合わせると、第一冊冒頭の鳳や鸞はともかく、実在する多くの種類に関しては、ある時点で実物写生が行われたことは、まず確実である。ただし、後述するように、現存する『鳥譜』自体は摹本であるから、写生が行われたのは、原型成立時のことであろう。なお、樹上性の鳥は樹上に、地上性の鳥は地上に描くという姿勢はほぼ一貫している。

譜文は、当然ながらまず鳥名を挙げ、別名がある場合には列挙する。以下の本文は、大きく三つの部分に分けられる。第一に、全種類についてはほぼ共通して見られるのは、上述したような色彩と形態、特に前者に関する記述である。これはときには睛（ひとみ）・暈（虹彩）・嘴から足・爪にまで及び、きわめて詳細である。こうした色彩の記述だけで、他には何もない例も少なくない。第二に、鶴（タンチョウヅル）、山鷓（サンジャク）、鶉（ウズラ）のような、古来著名な鳥については、当該の鳥に関する諸書の記事が引用されている。引用書は『山海経』、『爾雅』から『本草綱目』まで多岐にわたるが、その範囲は『古今圖書集成』「博物彙編・禽虫典」とほぼ共通しており、引用文自体も多くは「禽虫典」に見出すことができる。2-1で後述するように、本『鳥譜』の原型は、雍正朝以前に蔣廷錫が著した『鳥譜』に遡ると推定されるが、蔣廷錫が『古今圖書集成』の主編であることを考えれば、両者はきわめて密接な関係にあるといつてよいだろう。ただし、引用文の中には、「禽虫典」に見出せないものも若干あるようだが、現時点では全体にわたって詳細な比較検討を行うには至っていないので、本『鳥譜』が『古今圖書集成』のみによっているのか否かについては、結論を暫時保留しておきたい⁹⁾。第三に、他書からの引用ではない——少なくとも引用とは明記されていない——地の文として、鳥名に関する考証や、産地・習性に関する情報が載せられている場合もある。なお、満文はおおむね漢文からの忠実な翻訳と見られるが、引用部の末尾がどこであるか等、漢文ではわかりにくい箇所を明確にするのに役立つ

(3) 本『鳥譜』の譜文と『古今圖書集成』の関係については、江場山起氏にヒントをいただいた。記して感謝したい。

つ。

取り上げられている鳥の種類に関して言うと、鳳と鸞以外は、一応すべて実在の鳥と認められる。中国各地に野生する鳥が大半を占め、ミズナギドリ類、ウミツバメ類のような純然たる海鳥を除き、各類の鳥がほぼ漏れなく採録されていると言ってよい。一方、オウム・インコ類（約 20 種）のように、中国にはほとんど野生せず、輸入されて飼われていたと思われる鳥も、かなり収められている。配列に関しては、形態・色彩が似た鳥をまとめるという、ある種の自然分類の試みが——基準は必ずしも明確でなく、徹底されているわけでもないが——認められる。なお、360 という総数は、冒頭の「鳳」の項に、『大戴礼』の「羽虫三百六十，而鳳凰為之長」という句が引用されているので、それに合わせたものであろうが⁽⁴⁾、『本草綱目』の水禽類 23 種・原禽類 23 種・林禽類 17 種・山禽類 13 種計 76 種、『三才図会』の計 113 種と比較すれば、本譜の収録種数が際立っていることは言うまでもない。また、『本草綱目』や『三才図会』が漠然とした総称を挙げているものに対して、本『鳥譜』は種々の形容を付して細分化する例が目立ち、その程度は、ほぼ近代生物学における種(species)、場合によっては亜種(subspecies)・変種(variation)のレベルに達している。喜鵲(カササギ)を北喜鵲と(南)喜鵲に分けたり、鸚鵡(ハッカチョウ類)を体色に基づいて 4 種に分けたりしているのは、こうした細分化の最たるものである。

2. 成立過程

2-1. 満漢合璧『鳥譜』の成立

現存する満漢合璧『鳥譜』自体の成立については、さしたる困難なく確かめることができる。すなわち、『故宮鳥譜』の解説にも指摘されているように、『石渠宝笈続編』重華宮藏 12 に、「余省、張為邦合纂蔣廷錫鳥譜 十二冊」とあり、続いて次のような記載がある。

〔本幅〕絹本。十二冊。每冊三十幅。末冊三十二幅。縦一尺二寸五分，横一尺三寸。設色畫鳥属三百六十一種。右図左説。兼清漢書。……（中略。各冊の鳥名が列挙され、さらに「御製詠額摩鳥十韻」が載せられている）……

〔後幅〕臣工恭跋。右鳥譜十二冊，為圖三百有六十。内府旧藏故大学士蔣廷錫設色本。乾隆庚午春，勅畫院供奉余省、張為邦奉繪，並命臣等，以圖書記圖説，系於各幀之左。迄辛巳冬竣事，裝潢上呈乙覽。凡名之訛者，音之舛者，悉於幾餘，披閱舉示，復詳勘整正，并識其始末。臣等竊惟爾雅積鳥一篇，……（中略）……臣傅恒、臣劉統勳、臣兆惠、臣阿里衮、臣劉綸、臣舒赫德、臣阿桂、臣于敏中，恭跋。

以上から、乾隆 15 年(1750)に勅を奉じて、内府旧藏の蔣廷錫『鳥譜』12 冊を、余省・張為邦の両名が纂し、傅恒等が譜文を満訳し、跋文を付して、26 年(1761)に至ってようやく完成したことが知られ

(4) ちなみに、『禽經』の冒頭にも「羽虫三百六十」とある。

る。この記事によれば、譜文の満訳はこのときはじめて付されたもので、蒋廷錫の原『鳥譜』にはなかったと考えられること、尺寸が一致することから、現存する満漢合璧『鳥譜』が乾隆 26 年に完成したこの摹本であることは、まず疑いない。

2-2. 先行する 2 つの鳥譜

本『鳥譜』が摹本であるとなれば、底本である蒋廷錫の『鳥譜』とはどのようなものであったかが、まず問題となるが、『故宫鳥譜』の解説にも述べられているように、『石渠宝笈』（初編）御書房卷 2 には、「蒋廷錫畫鳥譜十二冊 上等宙一」と見え、次のような記事がある。

素絹本、着色畫。每冊凡三十幅。左方別幅書譜文。每冊末幅款云臣蒋廷錫恭畫。下有臣廷錫、朝朝染翰二印。共計三百六十幅。幅高一尺七分，広一尺二寸九分。

各冊 30 幅，12 冊計 360 幅という構成から見て、これが問題の底本であることは疑いない。蒋廷錫は言うまでもなく康熙朝末から雍正朝にかけての名臣であるが、画を善くしたことで知られ、張庚『国朝畫徵録』卷下には、「以逸筆写生，或奇或正，或工或率，或賦色，或暈墨，一幅中恒間出之，……無不超脱」云々と評されている。彼は雍正 10 年(1732)閏五月に大学士在任のまま卒しているから、『鳥譜』はそれ以前に作られたことになる。この原『鳥譜』が現存するか否かについては、いまのところ情報がないが、北京の故宫博物院を訪れた際、満漢合璧『鳥譜』と並んで、蒋廷錫『鵝鵲譜』が展示されており⁽⁵⁾、構図や画法には確かに相通ずるものがあつた。

ところが、『石渠宝笈』（初編）には、これと密接な関係があると見られる『鳥譜』が、いま一種著録されている。すなわち、同書乾清宮卷 3 に、「余省畫鳥譜十二冊 上等黄一」と見え、次のような説明が付されているのである。

素絹本。着色畫。每冊三十幅。每冊末幅款云臣余恭畫。下有臣余省、恭畫連印。每幅左方王図炳楷書譜文。每冊末款云，臣王図炳奉勅敬書。高一尺二寸五分，広一尺三寸。

余省は上述の通り、乾隆 15～26 年にかけて張為邦とともに蒋廷錫『鳥譜』を摹した当人であるし、12 冊，每冊 30 幅という構成といい、尺寸が完全に一致することといい、満漢合璧『鳥譜』にきわめて近いものであつたと推定される。かつ、『石渠宝笈』（初編）の成書は乾隆 10 年(1745)であるから、それ以前に成立したことは確実である。

では、蒋廷錫『鳥譜』と余省『鳥譜』の関係は、どのように考えられるだろうか。余省は、「畫院供奉」とあることから見れば、官人ではなく宮廷に仕えた職業画家であるが⁽⁶⁾、経歴については、江蘇常熟の人で、花鳥虫魚を善くし、模写にも巧みであつたこと、父珣、叔父璜も写生に長じた画家であつた

(5) 展示の解説によると、『鵝鵲譜』は上下 2 冊計 40 開で、康熙帝に献呈されたものという。図のみで譜文はない。

(6) 『清史稿』卷 504，芸術 3 には、「清制，畫史供御者無官秩，設如意館於啓祥宮南，凡絵工、文史及雕琢玉器、装潢帖軸皆在焉。……間賜出身官秩，皆出特賞」とあり、余省についても簡略な伝がある。

こと、弟穉も内廷に供奉したことが知られる程度で⁽⁷⁾、詳しいことはわからない。しかし、蔣廷錫に師事し⁽⁸⁾、また乾隆2年(1737)に内廷に入たと伝えられることからすれば⁽⁹⁾、彼の『鳥譜』が蔣廷錫のものに先行することはありえないだろう⁽¹⁰⁾。

なお、張為邦についても、経歴は余省以上にわからないが、カスティリオーネ(G. Castiglione, 郎世寧)に師事したと伝えられることは、本『鳥譜』に見られる西洋画の影響(3-1で後述)を説明するものかもしれない⁽¹¹⁾。

以上から、満漢合璧『鳥譜』の原型が、雍正朝以前に蔣廷錫の著したものに遡ることはほぼ明らかであるが、蔣廷錫『鳥譜』が完全にオリジナルなものなのか、さらにその原型が存在したのかについては、いまのところ確かめるすべがない。また、2-1で引用した『石渠宝笈続編』の記載からすれば、満漢合璧『鳥譜』の作成に際して、譜文には満訳と同時に多少の校訂が加えられたと見られるが、それがどの程度のものであったかについても、明らかにしえない。

2-3. 国立国会図書館所蔵『百花鳥図』

本『鳥譜』自体の成立過程の解明に資するところは必ずしも大きくないが、これと密接な関係があると思われる鳥譜が国立国会図書館に所蔵されているので、簡単に紹介しておきたい。問題の鳥譜は、『百花鳥図』と題するもので、国会図書館ホームページの「電子図書館：貴重書画像データベース」に収められて公開されている⁽¹²⁾。また、『図説日本鳥名由来辞典』には、収録された鳥の種名同定表もある⁽¹³⁾。この『百花鳥図』は、折本2帖で、折りたたんだ状態で縦約30cm×横約40cmの黄地の台紙に、縦約28cm×横約36cmの紙が貼付された形となっているが、紙の中央に折り目(切れ目?)が見えることからすれば、本来は綴じられていたものを解いて表装したのであろう。国会図書館のデータベースでは、表紙か

(7) 胡敬『国朝院畫録』卷上(于安瀾編『畫史叢書』上海人民美術出版社, 1963 所収); 彭蘊璠『歷代畫史彙伝』卷6(『和刻本書畫集成』第12輯, 汲古書院, 1977 所収)。

(8) 『故宮鳥譜』の解説による。なお、2-3で取り上げる『百花鳥図』の序にも、「蔣相国遊戯筆墨, 剋絶古今。其得意門生余省字曾三者, 長侍左右, 耳濡目染, 悉得画中三昧」とある。ともに江蘇・常熟出身であることも、兩人の結びつきを窺わせる材料といえよう。

(9) 北京故宮博物院の展示解説による。根拠は不明。

(10) ちなみに、『国朝院畫録』卷上も、余省『鳥譜』について「案〔石渠宝笈〕続編有省与張為邦合摹蔣廷錫鳥譜, 是冊殆省先專画後, 又与為邦合摹也」とし、蔣廷錫『鳥譜』をまず余省が単独で摹し、後にあらためて張為邦と合摹したものだとして述べている。

(11) 林莉娜「清朝皇帝与西洋传教士」『故宫文物月刊』236(20-8), 1992, 42-69 頁。たとえば、『清代宫廷绘画』(上海科学技术出版社, 1999)に図版が収められている張為邦「歳朝図軸」を見ると、確かに立体的な画法で、カスティリオーネの作品によく似ている。

(12) http://www3.ndl.go.jp/rm/kosyo_main.html

(13) 菅原浩・柿澤亮三編著『図説日本鳥名由来辞典』柏書房, 1993, 609-610 頁。

ら裏表紙まで、画像1コマ毎に通し番号が打たれているので、以下これによって冒頭部の体裁を示すと、01-001は表紙(青っぽい地に模様入り)、002は表紙裏である。003は扉の部分で、紙の貼付はここから始まる。中央には大きく「百花鳥圖」と書かれ、その右に「清余曾三画 張廷玉 鄂爾泰詩」、左に「馬齊冊額/文體記 驗體賦 沈燮菴丙議」とある⁽¹⁴⁾。以下004~007は沈燮の序(文體記・驗體賦)で、008には馬齊・張廷玉・鄂爾泰の名と官職が列記されている。009から図と詩文が始まり、最初は孔雀の図で、配されているのは牡丹である。010には、右半に「孔雀 牡丹」と題して鄂爾泰の詩を載せ、左半に「石青 櫻桃花」と題して張廷玉の詩があり、石青の図は次の011にある。以下同様の体裁で、各帖50図ずつ、計100図と、対応する詩が収められているのである。

さて、『百花鳥図』と本『鳥譜』の密接な関係を示すのは、次のいくつかの事実である。

- ① 曾三とは余省の字に他ならない。
- ② 『百花鳥図』に見える鳥は、すべて本『鳥譜』に含まれている(【表1】参照)。鳥名が一致しないものも若干あるが、その場合でも、『鳥譜』に挙げられた別名と一致する。
- ③ 個々の図を比較すると、ほとんどの場合、鳥の配置・ポーズが酷似している(【図a】【図b】参照)。

ただし、『百花鳥図』の図は、一見して明らかなように、デッサン・筆づかい・色彩のどれをとっても、本『鳥譜』と比べればはるかに稚拙であって、余省の真筆とは考えられない。さらに、鳥に配された植物が本『鳥譜』とは異なること、譜文ではなく張廷玉・鄂爾泰の詩が付されていることからすれば、『百花鳥図』は、本『鳥譜』の成立過程と密接な関わりのある何らかの原本に基づいているとしても、単に本『鳥譜』ないしその原型を抜粋して模写したというようなものではない。しかし、原本がどのようなものであったかについては、余省が図を描き、張廷玉・鄂爾泰が詩を賦した原本なるものが果たして存在したかどうかをも含めて、いまのところ何の情報も得られないので、今後の考究に委ねたい⁽¹⁵⁾。なお、現存する『百花鳥図』が中国と日本のどちらで作られたものかについても、決定的な証拠はないが、文字の略し方等はどちらかといえば日本風である。また、扉に「清余曾三画」とあるが、清国内で作られたとすれば、「清」の一文字だけを冠することは考えにくい。

以上のように、『百花鳥図』の由来についてはなお不明な点が多く残るが、同書は漢籍に見える鳥名に和名を当てるための工具として盛んに用いられたといわれ、有名な堀田正敦の『禽譜』(1830頃)にも、この『百花鳥図』(『百鳥図』の名で挙げられている)からの引き写しがかなり見られる⁽¹⁶⁾。このように、本『鳥譜』と系統を同じくする鳥譜が日本にもたらされて一定の影響を及ぼしたことは大変興味

(14) 沈燮菴丙なる人物については、いまのところ調べがついていない。『国朝書畫家筆録』巻4には、同治朝頃に活動した沈燮という画家の伝が見えるが、別人であろう。

(15) 『百花鳥図』に収められた張廷玉・鄂爾泰の詩の真正性についても、現時点では調査未了である。なお、『図説日本鳥名由来辞典』は、康熙帝の命によって余省が図を描き、雍正帝の時に完成したもので、その写本が元文2年(1777)に渡来したとしている。根拠は示されていないが、余省の活動時期等からすると、この作成・渡来年代は少し早すぎるのではなかろうか。

(16) 『図説日本鳥名由来辞典』565-577頁。

深く、博物学における日中交流史の研究を深めていく上で、一つの有力な材料となりうるであろう。

3. 本『鳥譜』の価値

3-1. 絵画としての評価

本『鳥譜』の価値については、さまざまな角度から論ずることが可能であるが、まず中国における花鳥画の伝統の中では、どのように評価しうるであろうか。この分野について筆者はまったくの門外漢であるので、通り一遍のことしか言えないが、まず、本『鳥譜』の写実的で精密な画風が、いわゆる文人画とは異なる、北宋以来の院体画の系列に属することは言うまでもない。しかし、院体花鳥画の成立に大きな影響を与えたといわれる黄筌の「写生珍禽図巻」とか、有名な宋・徽宗「桃鳩図」、あるいは明の辺文進や呂紀の作品と比較した場合、本『鳥譜』が、鳥の形態の捉え方、筆致の細やかさ、色使いの微妙さにおいて、それらを凌駕しているとはいいがたいであろう。一方、本『鳥譜』に、カステリオーネらによって伝えられた西洋画の立体的な画法の影響がある程度認められることは、『故宮鳥譜』の解説にも述べられているが、たとえばカステリオーネ自身の「畫孔雀開屏」、「仙萼長春二 薔薇鸚鵡」（ダルマエナガ）（ともに台北故宮博物院蔵）と、本『鳥譜』の「開屏孔雀」、「侶鳳速」を比べてみれば、本『鳥譜』の図は、立体感があるといっても中途半端であり、写実性・科学的正確さという点でも及ばないと言わざるをえない。要するに、本『鳥譜』は、単に絵画として見た場合、必ずしも駄作というわけではないが、独自の価値をもつ名品とも言いがたいものである⁽¹⁷⁾。

3-2. 博物学史における位置づけ

花鳥画としての評価が以上のようなものであるとすれば、本『鳥譜』の積極的意義は、むしろ博物学的側面に求めるべきであろう。先にも触れたように、本『鳥譜』の各図が、絵画としての効果、すなわち生命感・躍動感とか、装飾性といったものよりも、鳥の形態・色彩の精密な表現に重きを置いて描かれていることは明らかである。また、不吉なものとして花鳥画の画題に絶えて選ばれることのないフクロウ・ミミズクの類⁽¹⁸⁾が収められていることも、『鳥譜』が通常の花鳥画とは一線を画する存在であることを示していよう。譜文の方も、諸書からの引用や釈名はどちらかというだけ付け足しで、羽色や形態に関する淡々とした記述が主である。こうした点から見て、本『鳥譜』は、明らかに一種の博物図譜、あるいは鳥類図鑑として作られたものと言ってよい。

(17) 本節の記述は、多く宮崎法子氏のご教示に基づく。カステリオーネの「畫孔雀開屏」図と本『鳥譜』の相違についても、氏のご指摘による。ただし、全体としての文責はもちろん筆者にある。

(18) フクロウ・ミミズクが画題として忌み嫌われたことについては、宮崎法子『花鳥・山水画を読み解く——中国絵画の意味——』角川書店、2003、137頁。

ヨーロッパでは、18世紀に至り、リンネ(Carl Linne, 1707-78)、ビュフォン(Georges-Louis Leclerc de Buffon, 1707-88)という大博物学者の登場を契機として、博物趣味が大流行を見せ、これが絵画芸術と結びついて、大部・美麗な博物図譜—図鑑の刊行が相次いだことは、荒俣宏氏による再評価以来、広く知られるようになった⁽¹⁹⁾。また、日本においても、ほぼ同時期の17世紀後半から18世紀にかけて、貝原益軒『大和本草』の出版、将軍吉宗の命による諸国物産調査等を通じて、大名から庶民に至る幅広い階層の間で博物趣味が盛り上がったこと、さらにこれと花鳥画の伝統が結びついて、多くの細密・美麗な図譜が作られたことが、博物学史、絵画史の両面から明らかにされつつある⁽²⁰⁾。ところが、日本におけるこうした博物趣味が、中国の本草学を基礎とし、とくに『本草綱目』の将来が、その流行の一つの契機となったことが指摘されている⁽²¹⁾が、同時期の中国における博物学ないし博物図譜の状況については、必ずしも研究が進んでいないように思われる。

広く事物——特に自然界の諸物——に関する情報を包括的に収集・記録し、分類・整理するという博物学的発想は、もちろん中国においても、古い時代から見られ、『山海経』、『水経注』のような地理書、『異物志』、『南方草木状』のような地方物産志、あるいは『斉民要術』のような農書にも、その一端が認められる⁽²²⁾。しかし何と云っても、中国における博物学が、いわゆる本草学の分野で特異な発展を見せたことは周知の通りであって、『神農本草』以来、多くの本草書が連綿と編まれた。こうした本草書は、薬品の原料となる動植物の図を伴うことも少なくなく、たとえば唐代の勅撰『新修本草』の付図は、彩色された見事なものであったという⁽²³⁾。宋代になると、図入り本草書のいわば決定版として、蘇頌『図経本草』が著され、その図と解説は各種の『証類本草』に受け継がれている⁽²⁴⁾。さらに、明末の李自珍『本草綱目』は、収録薬品数において最大であり、かつ各薬品に対する記述の体裁を一新したことから、画期的な意義をもつとされるが、そればかりでなく、動植物に対して限定的ながらある種

(19) 荒俣宏『図鑑の博物誌』リプロポート、1984。

(20) 西村三郎『文明のなかの博物学：西欧と日本』（紀伊屋書店、1999）Ⅱ章「花ひらく江戸の博物学」。また、秋田蘭画や狩野派の花鳥画が、各種の博物図譜——鳥譜を含む——と密接に関わっていたことが、今橋理子『江戸の花鳥画：博物学をめぐる文化とその表象』（スカイドア、1995）第3～5章において指摘されている。

(21) 西村『文明のなかの博物学』105-112頁。

(22) 西村『文明のなかの博物学』214-222頁。『南方草木状』と『斉民要術』に関しては、小林清市『中国博物学の世界——「南方草木状」「斉民要術」を中心に——』（農山漁村文化協会、2003）第Ⅰ部『南方草木状』の研究および第Ⅱ部『斉民要術』の世界を参照。

(23) 西村『文明のなかの博物学』200頁。

(24) 同上書、200-202頁；宮下三郎「本草の図について——本草綱目附図の解説として——」（『本草綱目附図』上巻、春陽堂書店、1979、9-24頁）。

の自然分類を試みている点に、博物学的発想への一層の接近が認められるという⁽²⁵⁾。

以上のように、多くの本草書には、ある程度博物図譜に近い性格を認めることができるのであるが、本質から見れば、それらは何よりも薬品としての特徴・効能を解説するという実用的意図を主眼としている点で、ヨーロッパの博物誌とは一線を画すると言わざるをえない。一方、元・王禎『農書』、明・宋応星『天工開物』、明・趙子禎『神器譜』のように、農書や科学技術書の中にも、図解を伴うものが現れたけれども、主として人文世界の事物を扱う点、本草書と同様に実用への意識が濃厚に見られる点から、やはり純然たる博物図譜の範疇に含めるのは躊躇される。一方、おおむね宋代以降になると、より実用性の希薄な各種の譜録——植物・花卉関係が最も多い——が、主として士大夫・官僚の私撰として作られたが、大きな流行を見せるには至らず、かつ図を伴うものは稀であるという⁽²⁶⁾。ただし、明末の王圻『三才図会』（1607 刊）は、天地人三界の万物のありようを万人に知らしめるという啓蒙思想に基づいて、広く各種の事物を図とともに収載しており、すぐれて博物図譜と呼びうる性格を有しているが⁽²⁷⁾、例外的存在と言ってよいであろう。

一方、やはり古くから発達した類書も、天下の事物に一定の分類をほどこし、それに関する情報を広く収録しているという意味では、博物志と一脈通ずるものがある。しかし、言うまでもなく類書の本質は、それぞれの事物に関する先行諸書の記載を網羅的に採録して提供することにあり、事物それ自体のありようを説明することにはない。たとえば、康熙年間に編纂された最大の類書『古今圖書集成』には、既述のように「博物彙編・禽虫典」があり、多くの動植物が収録されているけれども、諸書からの膨大な引用は、それが真に同一の実体に関するものであるかについての考察を欠いたまま、無批判に羅列されており、しばしば相互に矛盾するので、読めば読むほど実体が遠くかすんでいくような印象さえ受ける。もちろん、こうした羅列的引用とは一線を画し、古典をはじめとする諸書に登場する諸々の事物の名を正しく解釈するために、一方でいわゆる釈名・訓詁の学が発達してくるのであって、その頂点がいわゆる清朝考証学である。しかしそれすらも、単に名前に関する自己完結的な考証——たとえば、A 書に現れる x と B 書に現れる x' は同一であるか否かといった——に終始し、事物の実体を直接説明するには至らない例が目立つ⁽²⁸⁾。

さて、上述のように、18 世紀になると、ヨーロッパにおいても、また日本においても、博物趣味の

(25) 西村『文明のなかの博物学』203-212 頁。ただし、『本草綱目』の分類法が実は客観分類と実用分類を混交したものであったことも指摘されている。山田慶児「本草における分類の思想」（『東アジアの本草と博物学の世界』上、思文閣出版、1995、3-42 頁）。

(26) 西村『文明のなかの博物学』219-220 頁。

(27) 西村氏は、『三才図会』に触発されて編まれた寺島良安『和漢三才図会』（1713 刊）が、江戸期博物学の興隆に一役買ったことを指摘している。同上書、115-116 頁。

(28) 清朝考証学のこのような傾向をするべく指摘した論考として、小林清市「清朝考証学派の博物学——『爾雅』釈名篇注を手掛りに——」（『東アジアの本草と博物学の世界』上、174-201 頁；後に『中国博物学の世界』にも収録）がある。

流行と絵画芸術とが結びついて、多くの華麗な博物図譜——図鑑が生み出されるに至った。ところが、中国においてはどうかであったかという点、花鳥画の長い伝統にも拘わらず、これと博物学的発想が結合した例は、多くは見出せない。『三才図会』にしても、木版本ということもあって、図の方は総じて簡略で、到底芸術品とはいえないし、科学的正確さという点でも言うに足りない。『本草綱目』に至っては、付図は後補されたものであって、特にいわゆる金陵初刊本のものは稚拙で見るに堪えない⁽²⁹⁾。清代に入っても状況は基本的に変わらず、本稿で取り上げた一連の『鳥譜』と、姉妹編ともいえるべき『獸譜』6冊をはじめ、宮廷内で作られたいくつかのものを除けば、各種の博物図譜が広く流布した事実は知られていないのである⁽³⁰⁾。

以上を要するに、中国においては、古代から清代に至るまで、本草という特殊な分野を除けば、博物誌—博物図譜自体が一般に発達せず、かつ、ヨーロッパや日本において見られたような博物誌と絵画芸術の結合も、きわめて限定的にしか生じなかったということになる。とすれば、本『鳥譜』を含むいくつかの宮廷図譜は、中国の博物学史および絵画史の中で、かなりユニークな位置を占める存在と言えるのではなかろうか。しかも、本『鳥譜』の祖形と考えられる蒋廷錫『鳥譜』が、康熙朝末ないし雍正朝に成立していることは、中国における本格的博物図譜が、日本での隆盛よりもやや早い時期に萌芽したことを示している。にもかかわらず、その後中国においては、日本におけるような大流行が見られなかった理由は何かであろうか。康熙～乾隆朝にかけて得られた科学技術上の諸成果が、宮廷—権力機構の内部に封じ込められて一般に流布せず、それ以上の発展を見ないまま、近代に至って時代遅れになっていくという現象は、たとえば地図・兵器・医学等の分野についても認められるが、博物学についても、同様の事情を想定することができるかもしれない。ただし、地図・兵器等の発展に関しては、主として宣教師の媒介による西洋科学の影響があったわけであるが、博物学ないし博物図譜について同様のことが言えるかどうかについては、にわかに判断するだけの材料を持たないので、今後の課題としたい。

3-3. 「名物学」への寄与

3-3-1. 図鑑としての評価

博物図譜——図鑑には、単に眺めて楽しむという読み方もあり得ようが、その主要な機能は、諸物の名前と実体を、図を媒介として一致させること、すなわち、図を介して名前から実物を知る、あるいは

(29) 『本草綱目附図』上巻。宮下三郎氏による同書の解説「本草の図について」をあわせて参照。

(30) なお、宮廷で作られた図譜類の中には、『皇清職貢図』のように、人間世界を対象とするものもあるが、こうしたものも一種の博物図譜と言えるかもしれない。一方、宮廷所蔵文物の絵入り目録である『西清硯譜』や『陶齋譜冊』の類も、ヨーロッパ流の博物図譜とは本質的に異なるが、宮廷絵画としての位置づけにおいては、『鳥譜』等と同列に置きうるであろう。

は逆に実物から名前を知るところにある。こうした「名物学」⁽³¹⁾のための工具として、本『鳥譜』はどの程度に評価できるものであろうか。それは、細かく言えば、①本『鳥譜』の図および形態・色彩等に関する説明が、どれだけ正確に実在の鳥を表現しえているか；②描かれた実物と名前の結びつけ方が妥当であるか否か；という二つの問題からなる。

まず前者について見よう。すなわち、本『鳥譜』の図と説明を、どれだけ現行の記述・分類体系による鳥名と結びつけることが可能か、ということである⁽³²⁾。『故宮鳥譜』の各冊末尾には、譜文の鳥名と現行鳥名（漢名・英名・学名）を対照した「鳥類古今名称参照表」が掲げられている。台湾大学の専門家の考証に基づくということなので、異を唱えるのは気が引けるが、明らかに疑問があるものについては私見を示し、筆者なりに整理したのが【表1】である。もちろん、筆者の力量では何としても同定できないもの、疑問符つきのものも少なくないが、それでも検討した120図のうち約90図、75%を、ほぼ確実に現行分類体系における「種」ないし「亜種」に当てはめることができた。これは、本『鳥譜』の作られた時代を考えれば、かなりの高率と言えよう。実際、大部分の鳥に関しては、図と譜文の説明はその鳥の特徴をほぼ的確に捉えており、さしたる困難もなく種名を割り出すことができた。一方、同定困難なものについて見ると、近似種が多く存在するグループについて、区別のポイントとなる微妙な特徴が図や譜文に表現されていないために、種までは特定できないというケースが多い。鸛鵒（モリハッカ？）、海八哥（シロチドリ？）、石畫眉（メボソムシクイ類？）、花黄燕（ヒイロサンショウクイ♀？）等はそうした例である。これは要するに記述・分類の精粗の差に起因するのであって、現在でも、種や亜種の区分については異なる見解が併存しているのだから、怪しむに足りない。このことをもって、ただちに本『鳥譜』の図や説明が拙劣であるなどとは言えないのである。

一方、後者の問題、すなわち実物（図）と名前の結びつけの妥当性ということを考えてみると、それを厳密に検証することは、実はきわめて難しい。その最大の理由は他でもなく、少なくとも現在知られている限り、本譜が前近代中国におけるほぼ唯一無二の網羅的鳥類図譜だということにある。前述のように、多くの種については、譜文には単に名前と色彩・形態の記述しかないが、そうした鳥については、図はもとより、名前自体も他書に見えない例が多いので、比較対照すべき材料がない。このような場合、本『鳥譜』の鳥名の当て方がどの程度普遍性を有していたかを検証することは、ほとんど不可能であろう。しかも、本『鳥譜』は鳥を細かく分類してそれぞれに名前を付す指向をもっているため、総称的な鳥名の前に種々の形容を加える例が多く見られる（たとえば「沈香色八哥」、「秋香色八哥」、「牙色裏毛大白鸛鵒」等）。こうした名前は、本『鳥譜』——あるいはその原型——が編まれる際に新たに創造された可能性があり、もしそうだとすれば、当否をあげつらうこと自体無意味であろう。

(31) 中国の鳥に関する実体と名前の結びつけの誤りが、近年の辞典においても多く見られること、「名物学」の深化が急務であることは、池本和夫「中国語の鳥類名をどう訳すか」『研究紀要—人文学部—』（明星大学）32、1996、13-22頁）；同「中国語辞典と名物学」『東方』187、1996）において指摘されている。

(32) もちろん、現在の記述・分類体系とて完璧なものとは言えないが、18世紀当時より精密なことは確かだから、取りあえず現行体系を基準として話を進める。

一方、古来広く知られ、種々の文献に登場する鳥名に関しては、諸書からの引用と、場合によっては若干の独自の考証が加えられているが、それにも問題がある。と言うのは、こうした引用や考証が、対象物の実体から遊離したまま自己完結してしまうという、前述したような中国の積名・考証学の通弊を免れていない例がまま見出せるからである。各論に踏み込むと際限がなくなるが、典型的な例の一つ挙げてみよう。本譜の第二冊には「鳳凰鸚鵡 一名時楽鳥」の図が載せられているが、この図は一見してコンゴウインコ (*Ara macao*) とわかる。一方、譜文には、唐・張説の「形貌乍同鸚鵡類，精神別稟鳳凰心」なる詩句、『西陽雜俎』所載の「開元中，有五彩鸚鵡能言，上令左右試牽帝衣，鳥輒嘆目叱咤。岐府文學能延京獻鸚鵡篇，以贊其事。張説獻時楽鳥篇，其序云……」なる故事，さらに『南史』の「扶南国出五色鸚鵡」，『南州異物志』の「杜薄州出五色鸚鵡，性尤慧解」なる記事が引かれている。ところが，ここに出てくる「時楽鳥」や「五色鸚鵡」が，図に描かれた「鳳凰鸚鵡」に他ならないとなぜ言えるのかという，われわれから見れば一番肝腎なポイントについては，「毛色煥爛，五采畢備」や，上記の張説の詩句を引いた直後にある「此鳥真足當鳳凰之名」という表現などに，関連づけへの指向が若干感じ取れないこともないが，およそ積極的な論証はなされていない。実際には，コンゴウインコは南アメリカ原産の鳥であるから，『西陽雜俎』や『南史』に登場する「時楽鳥」や「五色鸚鵡」はコンゴウインコではあり得ないのだが⁽³³⁾，結果としての当否はともかく，「時楽鳥」＝「五色鸚鵡」＝「鳳凰鸚鵡」であることを疑問の余地なく論証しよう，すなわち名前と実体とを結びつけようという意識自体が希薄なことに，ある種の歯がゆさを感じずにはいられない。こうした問題があるために，図と形態・色彩に関する説明が総じてよい出来映えであるにもかかわらず，古今の諸書によく見かける鳥名の実体を突きとめようという場合，本『鳥譜』は必ずしも決定的な根拠とはなりえないのである。なお，本『鳥譜』の鳥名の中には，もちろん現在普通に使われている鳥名と一致するものも少なくないが，図を見ると，実体が異なっている例もあり，注意が必要である。たとえば，本『鳥譜』第一冊には「灰鵲」が収められているが，「灰鵲」は現在ではクロヅル (*Grus grus*) を指すので，『故宮鳥譜』の「参照表」もクロヅルとしている。しかし，図を見る限り，これは明らかにナベヅル (*G. monacha*) である。

本『鳥譜』における鳥名と実体の関係は，少なくとも当時の宮廷人が持っていた知識・解釈を反映していることは疑いないのだから，中国の鳥に関する「名物学」を深めていくための一つの有力な手がかりとはなるであろうが，同時に，以上に述べたような種々の問題を伴っていることも弁えておかなければならない。

3-3-2. 満文鳥名について

本『鳥譜』のユニークな特徴の一つは，満漢合璧という点にあるが，満文部分には一体どのような価値を見出すことができるであろうか。譜文全般の検討は他日を期すこととして，取りあえず鳥名について考えてみたい。本『鳥譜』の満文鳥名は，「灰色洋鵲」を“fulenggingge namu kuwecike”としている例

(33) ちなみに，宋・徽宗作といわれる「五色鸚鵡図鑑」（ボストン美術館蔵）の「五色鸚鵡」は，ズグロゴシキセイガイインコ (*Trichoglossus ornatus*) と見られ，コンゴウインコとはまったく異なる。

のように、明らかに漢文からの直訳と見られるものもあるが、本来の満洲語名を当てたと見られるものも少なくない。鶴 = *bulehen* (タンチョウヅル)、灰鶴 = *kürcan* (ナベヅル) 等はその例である。こうした例を拾っていけば、満洲語における「名物学」に寄与するところは小さくないはずである。ただ問題となるのは、第一に、鳥名の上に種々の形容詞が加えられている場合である。たとえば小灰鶴 = *ajige kürcan* (アネハヅル) の場合、満洲語にもとからそういう語彙があったのか、それとも漢語の「小」に合わせて、“*ajige*” を冠したのか、にわかに判定しがたい。第二の問題は、本『鳥譜』が作られた乾隆朝前半は、従来の漢語からの音訳語に代わって、あらたな「満洲語らしい」語彙が創造されていた時代であるから、一見本来の満洲語らしく見える鳥名でも、二次的に作られた可能性がある、ということである。

本『鳥譜』に見える満洲語鳥名を、旧来のものと新しい人工的なものに分別するための一つの方策として、本『鳥譜』の前後に成立した各種辞書に登録された鳥名との比較が考えられる。網羅的な比較を行う余裕はないが、試みに、康熙 22 年(1683)序『大清全書』、乾隆 15 年(1750)序『清文彙書』、乾隆 36 年(1771)序『御製増訂清文鑑』、および乾隆 51 年(1786)序『清文補彙』を用いて、本『鳥譜』第一～四冊の 120 種について、登録の有無を調べてみたのが【表2】である。この表から直ちに導き出せるのは、『増訂清文鑑』(補編を含む)と本『鳥譜』の一致率がきわめて高いという事実である。オウム・インコ類のように、種々の形容がついて細分化されているグループがかなり欠けていることを除けば、主要な鳥名のほとんどは『増訂清文鑑』に見えているといつてよい。対応する漢語名も、若干の例外を除いて一致する。『清文補彙』になると、オウム・インコ類もかなり加わって、一致率はさらに高くなる。これに対して、『大清全書』に見出せる鳥名は、わずか 10 種にも満たない。『清文彙書』では若干増えるが、それでも本『鳥譜』の満文名とぴったり一致するのは 17 種程度に過ぎない。語釈を見ても、漢語鳥名は本『鳥譜』とはほとんど一致しないし、それどころか、たとえば“*hongko cecike*”の語釈「雀名胸黄腰背青叫声如燕子。比 *honggon cecike* 畧小」のように、漢語名がまったく当てられていない例も多い。以上のような状況と、本『鳥譜』の満文が、蔣廷錫『鳥譜』を摹繪する際にあらたに付されたものであることを考え合わせれば、『大清全書』や『清文彙書』に見えない多くの鳥名は、本『鳥譜』編纂の際に新規に考案され、後に『増訂清文鑑』や『清文補彙』に取り入れられたのではないかと、この推定が成り立つ。もちろん、従来から存在した鳥名についても、対応する漢語名をあらたに検討し確定する作業——たとえば“*hongko cecike*”を「柿黄」(マミジロキビタキ)に当てるといったような——が並行して進められたであろう。

以上のことを踏まえた上で、『清文彙書』や『大清全書』に見える鳥について、本『鳥譜』の図から実体を割り出していくと、確かにその多くは東北地方に自然分布するもので(たとえば *isha* = カケス、*jinjiba* = チョウセンメジロ、*calihün* = ベニヒワ、*meihe cecike* = アリスイ等)、満洲人が早くから接し、名づけていた鳥の範囲というものが、おぼろげながら浮かび上がってくる。ただし、中には満洲語名と実体(図)の結びつけ方が妥当かどうか、心許ない例もある。たとえば、『清文彙書』は、“*jingjara*”, “*jeleme cecike*”, “*fiyasha cecike*”, “*bunjiha*”をすべて「家麻雀」としているが、本『鳥譜』は前三者を「五道眉」(ヒゲホオジロ)、「儉倉」(コシジロキンバラ)、「嘉雀」(スズメ)に当て、別の種類としている(*bunjiha*

は本『鳥譜』の第一～四冊には見えない)³⁴⁾。この名前の当て方が正しいかどうかは、何とも言えない。特にコシジロキンバラは南方の鳥であるから、本来 *jelme cecike* がこの鳥を指していたかどうか、かなり疑わしい。本『鳥譜』における名前と実体の結びつけの妥当性・普遍性の検証が難しいことは、漢語名に関してすでに 3-3-1 で述べたが、満洲語名についても同様のことが言えるのである。

もちろん、あらたに作られたり、あるいは当て方を誤ったりした鳥名も、どれだけ一般に普及したかは疑わしいにせよ、本『鳥譜』に収められ、『増訂清文鑑』等に取り入れられた以上は、いわば清朝公認のものである。従って、たとえば満和辞典を編纂しようという場合には、当然採録されることになる。その際、適切な訳語を当てるためには、やはり本『鳥譜』を必ず参照しなければならないことは言うまでもない。こうした面においても、本『鳥譜』の満文がもつ意義は決して小さくはないのである。

3-4. 清朝宮廷における鳥

本『鳥譜』の図のほとんどは、前述のように、ある時点で行われた実物写生に基づいているはずである。いつ誰が写生したのか、確実なところは明らかにしがたいが、内廷あるいはそれに近いところでなされたかと仮定すれば、本『鳥譜』に収録された鳥は、当時の清朝宮廷人が何らかの形で接することができた種類ということになる。そのような目で、あらためて全体を眺めわたしてみると——北京所蔵の 8 冊については検討が不十分であるが——、大体の傾向として、東北・華北から東南沿海地方にかけて産する鳥が多数を占めることがわかる。中国西南部（特に雲南）と新疆は、特異な鳥種が多数生息することで知られるが、それらはほとんど収められていない。これは、当時の清朝の版図、北京の宮廷に鳥がもたらされうる範囲を考慮すれば、ほぼ自然なことといえる。また、ワシタカ類（約 30 種）、ガンカモ類（約 40 種）、キジ類（約 30 種）が特に多いのは、狩猟等を通じてなじみ深かったからであろう³⁵⁾。

一方、本来中国に産しない、飼養のために輸入された鳥も注目に値する。既述のように、本『鳥譜』には、オウム・インコ類の図が 23 ほど収められているが、同定困難なものや、同種の雌雄が別図になっているもの等を除いた 18 種について見ると、中国内に自然分布するものも 3 種ばかりあるが、他はインドから東南アジア大陸部を主産地とするものが 4 種、アフリカ産のものが 1 種、モロッカ諸島など東南アジア島嶼部からニューギニアにかけて分布するものが 8 種、中央～南アメリカ産のものが 2 種である。後二者は、言うまでもなくオランダ、スペインの手を通じてもたらされたものであろう。また、アフリカ産のヨウム（灰色洋鸚哥）については、譜文に「此種粵志皆諸書不載、新從海洋來者」とある。一方、オーストラリアはオウム・インコ類の大産地であるが、オーストラリア本土を主産地とする種類は収められていない。このあたりに、当時の北京宮廷を取り巻く交易圏の広がりや限界が窺えるのではなかろうか。

(34) ちなみに、『清文補集』の“*jingjara*”の項を見ると、「五道眉。本旧語与 *fiyasha cecike* 等四句通曰家雀。今各分定」とある。

(35) 日本においても、江戸時代に成立した多くの鳥譜と、大名の狩猟活動の間に密接な関係があったことが指摘されている。今橋『江戸の花鳥画』第 6 章。

また、特定の鳥に関して、清朝宮廷人の抱いていた特殊な観念が窺われる例もある。本『鳥譜』は、既述のように各類の鳥をほぼ漏れなく収録しており、吉祥・不吉といったことに特にこだわっているようには見えない。しかし、たとえば喜雀（カササギ）について、本『鳥譜』は北喜雀 = amargingge saksaha と喜雀 = saksaha（譜文には南喜雀 = julerjingge saksaha とある）の二種に区別している。譜文によると、北喜雀は南喜雀に比べて嘴が太く、体が大きくて尾も太く、背（正確に言えば肩羽）の白毛が少ないのだという。現在の分類によれば、カササギ（*Pica pica*）には確かにいくつかの亜種があるが、東北や華北に分布するのは *P. p. sericea* で、中国東南部に分布するものと同じとされている。一方、東北西北部からモンゴルにかけては、別亜種 *P. p. leucoptera* が分布するが、その主な特徴は、肩羽の白色部の大小ではなく、初列風切の白色部が大きいことにあるらしいので、いずれにせよ譜文の記述とはうまく符合しない⁽³⁶⁾。しかし、そうしたことはともかく、清朝においてカササギが特別に神聖視されていたことを考えると、本『鳥譜』がわざわざ二種に分けていることは、カササギに対する独特のこだわりを示しているとも言えそうである。

本『鳥譜』に対する研究をさらに深めていけば、以上の他にも、清朝宮廷と鳥との関わりをめぐる様々の興味深い事象を掘り起こすことができるのではないかと期待されよう。

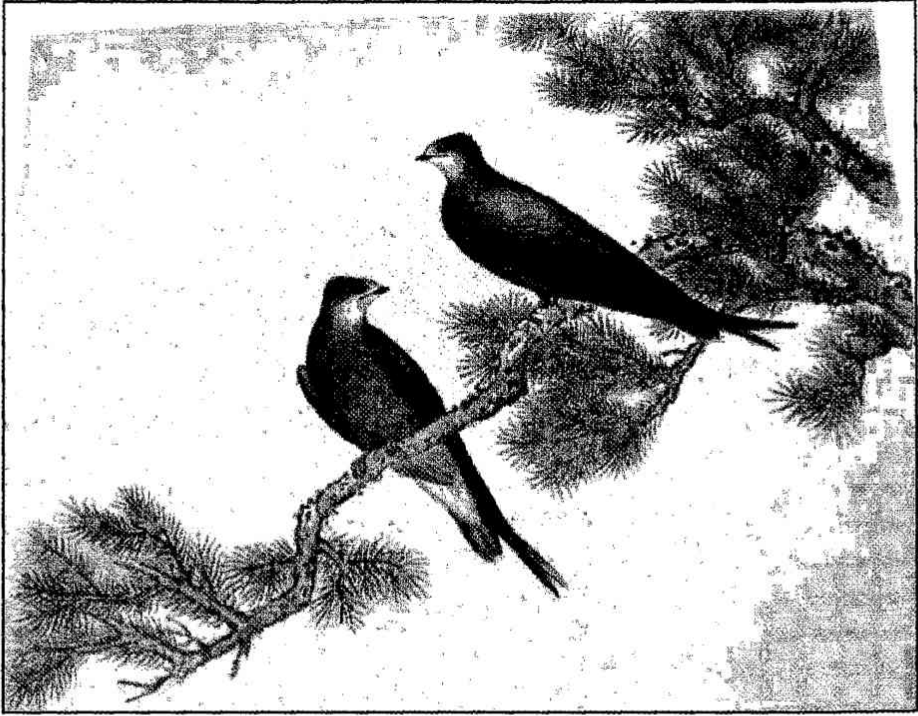
4. 結び

以上、故宮博物院蔵満漢合璧『鳥譜』について、その成立過程と価値を中心に、若干の考察を試みた。何分にも不案内な分野であることから、明確な結論を導き出すに至らず、単なる問題提起に終わった部分も少なくない。また、北京の故宮博物院を訪れた際、本『鳥譜』と姉妹編の『獸譜』、また前述した蒋廷錫『鵠鵠譜』と並んで、『海錯圖譜』、『鵠譜』等、清代に民間や宮廷で描かれたいくつかの図譜が展示されていた。こうした各種図譜の全体としての数量や相互関係についても、当然考究すべきところであるが、本稿ではまったく踏み込むことができなかった。このように不備の多い内容ではあるが、今後の清代博物学——博物図譜史研究の進展のための叩き台ともなれば幸いである。

なお、本稿の執筆に当たっては、台北故宮博物院の莊吉發氏、馮明珠氏、劉芳如氏、譚怡令氏に一方ならぬご教示とご助力をいただいた。また、竹下信雄氏からは貴重な文献を拝借した。記して謝意を表したい。記して謝意を表したい。

(YANAGISAWA, Akira 早稲田大学文学部)

(36) 鄭作新『中国鳥類分布名録』（第二版）科学出版社、1976；東北保護野生動物聯合委員会『東北鳥類』遼寧科学技術出版社、1988；約翰・馬敬能(John MacKinnon)他『中国鳥類野外手冊』湖南教育出版社、2000。



【図a】『鳥譜』の「石燕」(部分) (5-27, 北京故宫博物院蔵)



【図b】『百花鳥図』の「石燕」(国立国会図書館ホームページ
「貴重書画像データベース:百花鳥図」第2帖〈02-069裏〉より転載)

【表1】鳥名同定

巻一No.	漢語名	鳥類古今名称参照表	学名	和名	百花鳥図
01-01	鳳				1-012
01-02	鸞				2-004
01-03	孔雀	緑孔雀	<i>Pavo muticus</i>	マクジャク	1-010
01-04	開屏孔雀	緑孔雀(公鳥)	<i>Pavo muticus</i>	マクジャク	
01-05	鶴	丹頂鶴	<i>Grus japonensis</i>	タンチョウヅル	1-080
01-06	灰鶴	灰鶴	<i>Grus nigricollis</i>	ナベヅル*	1-038
01-07	小灰鶴	寶羽鶴	<i>Anthropoides virgo</i>	アネハヅル	
01-08	藍	白鶴	<i>Grus vipio</i>	マナヅル*	
01-09	北喜鵲	喜鵲(新疆亜種)	<i>Pica pica</i>	カササギ	
01-10	喜鵲	喜鵲(東北亜種)	<i>Pica pica</i>	カササギ	2-072(南喜鵲)
01-11	山喜鵲	灰喜鵲	<i>Cyanopica cyana</i>	オナガ	
01-12	白喜鵲			カササギの白化個体?	
01-13	山鷓鴣	紅嘴藍鷓鴣	<i>erythrorhyncha</i>	サンジャク	
01-14	黑山鷓鴣	灰樹鷓鴣		?	
01-15	靛花	藍磯鷓鴣		?	
01-16	石青	紫嘯鳥	<i>Myophonus caeruleus</i>	オオルリチョウ	1-011
01-17	鸛鷓鴣	林八哥	<i>Acridotheres grandis?</i>	モリハツカ?	2-013
01-18	沉香色八哥	八哥	<i>cristaellus?</i>	ハツカチョウ?	
01-19	秋香色八哥	家八哥之變種	<i>Acridotheres tristis?</i>	カバイロツカ?	
01-20	白八哥			白化個体?	1-063
01-21	花八哥	黑翅椋鳥	<i>Sturnus melanopterus</i>	ソデグロムクドリ	
01-22	燕八哥	白頸椋鳥	<i>Sturnus cineraceus</i>	ムクドリ	
01-23	山八哥	樹鷓鴣	<i>Dendrociitta formosae</i>	タイワンオナガドリ	
01-24	海八哥	蒙古鵲	<i>Charadrius alexandrius</i>	シロドリ?	
01-25	番八哥	大擬啄木鳥	<i>Megalaima virens</i>	オオゴシキドリ	
01-26	白哥	黑領椋鳥(母鳥)	<i>Sturnus sturnius?</i>	シベリアムクドリ♀?	
01-27	瑞紅鳥	爪哇雀	<i>Padda oryzivora</i>	ブンチョウ	2-076
01-28	灰色洋鵲	灰林鵲	<i>Columba livia</i> var. <i>domestica?</i>	ドバト?*	
01-29	鸛鵲	白鵲		飼養品種?	1-089
01-30	毛脚鵲			飼養品種?	
02-01	西綠鸚哥	紅領綠鸚哥(母鳥)	<i>Psittacula krameri</i>	ホンセイインコ♀	
02-02	南綠鸚哥	灰頭鸚哥(公鳥)	<i>Psittacula alexandri</i>	ダルメインコ♂*	1-021/1-024
02-03	黑嘴綠鸚哥	黑嘴綠鸚哥(公鳥)	<i>Psittacula alexandri</i>	ダルメインコ♀*	
02-04	洋綠鸚哥	洋綠鸚哥(公鳥)	<i>Eclectus roratus</i>	アカムラサキインコ♂*	
02-05	洋綠鸚哥	洋綠鸚哥(母鳥)	<i>Brotogeris versicolurus</i>	キンデインコ*	1-018
02-06	紅頸綠鸚哥	紅頸鸚哥(公鳥)	<i>Psittacula longicauda</i>	オナガダルメインコ♂	
02-07	柳綠鸚哥	柳綠鸚哥(公鳥)	<i>Psittacula eupatria</i>	オオホンセイインコ♂	
02-08	牙色裏毛大白鸚鵡	金剛鸚鵡(公鳥)	<i>Cacatua moluccensis</i>	オオバタン*	1-023
02-09	葵黃裏毛大白鸚鵡	金剛鸚鵡(母鳥)	<i>Cacatua alba</i>	タイハクオウム*	
02-10	葵黃頂花小白鸚鵡	金剛鸚鵡(小種)(公鳥)	<i>Cacatua sulphurea</i>	コバタン*	1-020(黃頂小白鸚鵡)
02-11	牙色頂花小白鸚鵡	金剛鸚鵡(小種)(公鳥)	<i>Cacatua sulphurea citrinocristata</i>	コキサカオウム*	

02-12	鳳凰鸚鵡	鳳凰鸚鵡	<i>Ara macao</i>	コンゴウインコ*	
02-13	金頭鸚鵡	金頭鸚鵡	<i>Amazona ochrocephala</i> <i>ortatrix</i>	オオキボウシインコ	
02-14	青頭紅鸚哥	青頭紅鸚哥	<i>Lorius domicellus</i>	ズグロインコ	
02-15	緑翅紅鸚哥	緑翅紅鸚哥(公鳥)	<i>Lorius garrulus</i>	ショウジョウインコ*	1-015
02-16	翠尾紅鸚哥		<i>Alisterus amboinensis</i>	オウインコ	
02-17	蓮青鸚鵡		<i>Eclectus roratus</i>	アカムラサキインコ♀*	1-026(青蓮鸚鵡)
02-18	黃鸚哥			?	1-014
02-19	灰色洋鸚哥	非洲灰八哥	<i>Psittacus erithacus</i>	ヨウム	1-017
02-20	黃丁香鳥	黃愛情鳥	<i>Trichoglossus</i> <i>haematodus</i>	ゴシキセイガイインコ*	2-006
02-21	緑丁香鳥	緑愛情鳥	<i>Trichoglossus sp.</i>	セイガイインコsp.*	
02-22	了哥	鸚哥	<i>Gracula religiosa</i>	キュウカンチョウ	2-037
02-23	山鸚哥	三宝鳥(佛法僧)	<i>Eurystomus orientalis</i>	ブッポウソウ	
02-24	倒挂鳥	短尾鸚鵡	<i>Loriculus vernalis</i>	ミドリサトウチョウ	2-025(倒挂鳥一名緑毛玄鳳)
02-25	黑嘴倒挂	黑嘴短尾鸚鵡	<i>Loriculus galgulus</i>	サトウチョウ*	
02-26	珊瑚鳥	白喉笑鸚	<i>Garrulax chinensis</i>	タイカンチョウ	1-044
02-27	黃山鳥	傾笑鸚	<i>Garrulax pectoralis</i>	クビワガビチョウ*	1-033(黃山鳥鳥)
02-28	緑山鳥	藍緑鸚	<i>Cissa chinensis</i>	ヘキサシ	2-052
02-29	松鴉	松鴉(東北亜種)	<i>Garrulus glandarius</i>	カケス	
02-30	白松鴉	松鴉(北京、甘肅亜種)	<i>Garrulus glandarius</i>	カケス	
03-01	金翅	黒頭金翅雀	<i>Carduelis sinica</i>	カワラヒワ*	1-032
03-02	柿黄	白眉鶺鴒	<i>Ficedula zanthopygia</i>	マミジロキビタキ	
03-03	黃道眉	黃喉鶺鴒(公鳥)	<i>Emberiza elegans</i>	ミヤマホオジロ♂	1-068
03-04	淡黃道眉	黃喉鶺鴒(母鳥)	<i>Emberiza elegans</i>	ミヤマホオジロ♀	
03-05	五道眉	灰眉岩鶺鴒(北疆亜種)	<i>Emberiza cia</i>	ヒゲホオジロ	
03-06	白道眉	灰眉岩鶺鴒(華北亜種)	<i>Emberiza cioides</i>	ホオジロ*	
03-07	畫眉	畫眉(海南亜種)	<i>Garrulax canorus</i>	ガビチョウ	2-033
03-08	石畫眉	宝興雀鶺鴒	<i>Phylloscopus sp.</i>	メボソムシクイsp.*?	
03-09	山畫眉	大草鶺鴒	<i>Garrulax davidi</i>	キタガビチョウ*	
03-10	燕雀	花雀	<i>Fringilla montifringilla</i>	アトリ	
03-11	白花雀	華鶺鴒	<i>Embeliza pallasi</i>	シベリアジュリン	
03-12	山花雀	黍鶺鴒	<i>Monticola sp.</i>	イソヒヨドリsp.♀*	
03-13	金雀	黒臉鶺鴒(日本亜種)	<i>Emberiza aureola</i>	シマアオジ*	
03-14	侶鳳述	棕頭鶺鴒(粉紅鸚鵡)(四川亜種)	<i>Paradoxornis webbianus</i>	ダルマエナガ	1-062
03-15	南相思鳥	紅嘴相思鳥	<i>Leiothrix lutea</i>	ソウシチョウ	2-031
03-16	粉眼	暗緑繡眼鳥(緑繡眼)	<i>erythropleura</i>	チョウセンメジロ*	
03-17	金眼	金眶鶺鴒(小環頸鶺鴒)	<i>Charadrius dubius</i>	コチドリ	
03-18	喇叭鶺鴒	横斑鶺鴒		?	
03-19	槐串	暗緑柳鶺鴒	<i>Phylloscopus inornatus?</i>	キマユムシクイ*?	2-021(槐串一名銅鈴)
03-20	金鈴	黃嘴朱頂雀		?	
03-21	白頭金鈴	白頭金翅雀	<i>Carduelis sinica?</i>	カワラヒワ?	
03-22	太平雀	太平鳥	<i>Bombicilla garrulus</i>	キレンジャク	
03-23	太平雀	小太平鳥(朱連雀)	<i>Bombicilla japonica</i>	ヒレンジャク	2-078(十々紅即太平雀)
03-24	珠頂紅	火冠雀	<i>Acanthis flammea</i>	ベニヒワ*	1-080
03-25	花紅燕	長尾山椒鳥(公鳥)	<i>Pericrocotus ethologus</i>	オナガベニザンショウクイ♂	2-015(花紅燕一名赤鸚一名朱衣)
03-26	花黃燕	長尾山椒鳥(母鳥)	<i>Pericrocotus flammeus</i>	♀*?	2-018(華黃燕)
03-27	山花燕	仙鶺鴒(仙鶺鴒之一種)	<i>Phoenicurus aureus</i>	ジョウビタキ*?	2-036(山花燕一名五色子)
03-28	南百舌	烏鶺鴒(四川亜種)	<i>Turdus merula</i>	クロウタドリ	
03-29	北百舌	(白翅藍鶺鴒)	<i>Turdus boulboul</i>	ハイバネツグミ♂*	

03-30	雌北百舌	(白翅藍鵲)	<i>Turdus boulboul</i>	ハイバネツグミ♀*	
04-01	藍靛類	白腹藍鵲(白腹琉璃)(北亞種)	<i>Cyanoptila cyanomelana</i>	オオルリ	
04-02	黒靛類	白喉石(即+鳥)	<i>Saxicola torquata</i>	ノビタキ	
04-03	紅靛類	紅喉歌鵲(野鵲)	<i>Erithacus calliope</i>	ノゴマ?	1-045
04-04	白靛類	紅背藍尾鵲(藍尾鵲)(西南亞種)	<i>Tarsiger cyanurus?</i>	ルリビタキ	
04-05	靠山紅	朱雀	<i>Carpodacus erythrinus</i>	アカマシコ	2-060
04-06	金絲麻鶯	黃雀		カナリア類か?	
04-07	黃鶯	黒枕黃鶯	<i>Oriolus chinensis</i>	コウライウグイス	2-040
04-08	鶯雛	黒枕黃鶯(幼鳥)	<i>Oriolus chinensis</i>	コウライウグイス(幼鳥)	
04-09	蛇頭鳥	鵲鴝(地啄木)	<i>Jynx torquilla</i>	アリスイ	
04-10	白頭翁	白頭鵲	<i>Pycnonotus sinensis</i>	シロガシラ	1-028
04-11	白頭郎	小燕尾(小剪尾)	<i>Oenanthe hispanica</i>	カオグロサバクヒタキ (セグロサバクヒタキ)*	
04-12	雙喜	黒頭燕尾	<i>Enicurus leschenaulti</i>	エンビシキチョウ	2-051
04-13	吉祥鳥	白腰文鳥	<i>Lonchura punctulata</i>	シマキンバラ*	2-042
04-14	五更鳴	高山嶺雀(中国有七亞種)	<i>Acanthis flavirostris</i>	キバシヒワ*	2-063
04-15	西寧白	高山嶺雀(冬羽)	<i>Rhodopechys githaginea</i>	ナキマシコ*	
04-16	儉倉	白腰文鳥	<i>Lonchura striata</i>	コシジロキンバラ	
04-17	長春花鳥	黒領椋鳥	<i>Sturnus nigricollis</i>	クビワムクドリ	2-043(長春花鳥一名萬春鳥)
04-18	嘉雀	樹麻雀	<i>Passer montanus</i>	スズメ	1-074(嘉雀一名嘉賓)
04-19	白嘉雀			白化個体?	
04-20	花嘉雀	栗腹文鳥(黒頭文鳥)	<i>Lonchura malacca atricapilla</i>	ギンバラ(亜種キンバラ)	
04-21	黃雀	黃雀	<i>Carduelis spinus</i>	マヒワ	
04-22	山雀	赤翅沙雀(沙雀之一種)	<i>Passer rutilans</i>	ニューナイスズメ*	
04-23	鵲鴝	鵲鴝	<i>Coturnix coturnix</i>	ウズラ	2-030
04-24	北牛鵲	林三趾鵲	<i>Turnix sylvatica</i>	ヒメミフウズラ	
04-25	南牛鵲	黃脚三趾鵲(母鳥)	<i>Turnix tanki</i>	チョウセンミフウズラ	1-078(南牛鵲即鴛鳥)
04-26	白翎	二斑百靈	<i>Melanocorypha mongolica</i>	コウテンシ*	
04-27	阿蘭	短趾百靈	<i>Alauda gulula?</i>	タイワンヒバリ?*	1-039(阿蘭一名阿蓋)
04-28	米色阿蘭	亞州短趾百靈(新疆亞種)	<i>Calandrella rufescens (C. cheleensis)?</i>	コヒバリ?	
04-29	鳳頭阿蘭	鳳頭百靈(東北亞種)	<i>Galerida cristata</i>	カンムリヒバリ	
04-30	鳳頭花阿蘭	雲雀		?	

学名・和名は、下記の文献およびサイトに基づいて筆者が推定したものである。*は、「鳥類古今名称参照表」と見解が異なることを示す。また、♀♀については特に必要な場合を除き示していない。

鄭作新『中国鳥類分布名録』(第二版)科学出版社, 1976

山階鳥類研究所編『世界の鳥の和名:Ⅷ. 中国の鳥(改訂版)』1983

菅原浩・柿澤亮三編著『図説日本鳥名由来辞典』柏書房, 1993

宇田川竜男『飼鳥・家畜』(標準原色図鑑全集18)保育社, 1971

『中国野鳥図鑑』翠鳥文化事業有限公司, 1996

約翰・馬敬能(John MacKinnon)他『中国鳥類野外手冊』湖南教育出版社, 2000

Forshaw, J.M. *Parrots of the World*. New York, Doubleday & Company, 1973

World Birds Index (http://www.atori.co.jp/birds/dic/search_birds.html)

【表2】満洲語鳥名の各種辞書への採録状況

巻-No.	漢語名	満洲語名	大 清 全 書	清 文 彙 書	増訂清文鑑 ／清文補彙	増訂清文鑑／清文補彙の 鳥名
01-01	鳳	garudai			○	
01-02	鸞	garunggu			○	
01-03	孔雀	tojin	○	○	○	
01-04	開屏孔雀	huwejengge tojin			▲	huwejengge tojin
01-05	鶴	bulehen	△	△	○	
01-06	灰鶴	kūrcan		△	○	
01-07	小灰鶴	ajige kūrcan			○	
01-08	藍	lamurcan			○	
01-09	北喜鵲	amargingge saksaha	*	*	補○	
01-10	喜鵲	saksaha	△	○	○	
01-11	山喜鵲	alin i saksaha	*	*	○	
01-12	白喜鵲	šahūn saksaha	*	*	○	
01-13	山鷓鴣	alin i jukidun			○	
01-14	黑山鷓鴣	sahaliyan alin i jukidun			補△▲	黒山鷓鴣: sahaliyan alin jukidun
01-15	靛花	giyen gasha			○	
01-16	石青	fulaburu gasha			○	
01-17	鸚鵡	kiongguhe			○	
01-18	沉香色八哥	soboro kiongguhe				
01-19	秋香色八哥	sohokon kiongguhe				
01-20	白八哥	šanyan kiongguhe			補○	
01-21	花八哥	alha kiongguhe			○	番鸚鵡の別名として採録
01-22	燕八哥	cibingga kiongguhe			○	
01-23	山八哥	alin i kiongguhe			△	山鸚鵡
01-24	海八哥	mederi kiongguhe			○	
01-25	番八哥	tubet kiongguhe			△	番鸚鵡
01-26	白哥	cakūlu kiongguhe			○	
01-27	瑞紅鳥	sabingga cecike			○	
		fulenggingge namu				
01-28	灰色洋鵲	kuwecihe	*	*	○	
01-29	鸚鵡	šanyan kuwecihe	*	*	○	
		nunggari fathangga				
01-30	毛脚鵲	kuwecihe	*	*	○	
		wargingge				
02-01	西綠鸚哥	niowanggiyan yenggehe			補○	
		julergingge				
02-02	南綠鸚哥	niowanggiyan yenggehe			補○	
		sahaliyan engge				
02-03	黑嘴綠鸚哥	niowanggiyan yenggehe			補○	
		namu niowanggiyan				
02-04	洋綠鸚鵡	yengguhe			補○	
		namu niowanggiyan				
02-05	洋綠鸚哥	yenggehe			補○	
		fulgiyan šakšahangga				
02-06	紅頰綠鸚哥	niowanggiyan yenggehe				
02-07	柳綠鸚哥	niowanggiyan yenggehe			○	
		suhuken bocoi nunggari				
02-08	牙色裏毛大白鸚鵡	amba šanyan yengguhe	*	*		

02-09	葵黃裏毛大白鸚鵡	sohon bocoi nungari amba šanyan yengguhe	*	*		
02-10	葵黃頂花小白鸚鵡	sohon bocoi ujui ilha i ajige šanyan yengguhe	*	*		
02-11	牙色頂花小白鸚鵡	suhuken bocoi ujui ilha i ajige šanyan yengguhe	*	*		
02-12	鳳凰鸚鵡	garudangga yengguhe	*	*	○	
02-13	金頭鸚鵡	aisin ujungga yengguhe	*	*	○	
02-14	青頭紅鸚哥	lamun ujungga fulgiyan yenggehe			補○	
02-15	綠翅紅鸚哥	niowanggiyan ahangga fulgiyan yenggehe			補○	
02-16	翠尾紅鸚哥	niowari uncehengge fulgiyan yenggehe			補○	
02-17	蓮青鸚鵡	šulaburu yengguhe			△	連青鸚鵡
02-18	黃鸚哥	suwayan yenggehe			補○	
02-19	灰色洋鸚哥	fulenggingge namu yenggehe				
02-20	黃丁香鳥	suwayan yenggetu			○	
02-21	綠丁香鳥	niowanggiyan yenggetu			○	
02-22	了哥	cinjiri			○	
02-23	山鸚哥	alin i yenggehe			補○	
02-24	倒掛鳥	sukiyari cecike			△	倒掛鳥
02-25	黑背倒掛	sahaliyan engge sukiyari cecike			補△	黑背倒掛鳥
02-26	珊瑚鳥	šuru cecike			○	
02-27	黃山鳥	alin suwayangga cecike			△▲	黃山鳥:alin i suwayangga cecike
02-28	綠山鳥	alin niowanggiyangga cecike			△▲	綠山鳥:alin i niowanggiyangga cecike
02-29	松鴉	isha	△	△	○	
02-30	白松鴉	šanyan isha	*	*	補○	
03-01	金翅	aisha cecike			○	
03-02	柿黃	hongko cecike		△	○	
03-03	黃道眉	suwayan faitangga			○	
03-04	淡黃道眉	suntu cecike			▲	sontu cecike
03-05	五道眉	jingjara		△	○	
03-06	白道眉	yentu cecike			○	
03-07	畫眉	yadali cecike			○	
03-08	石畫眉	wehe yadali cecike			○	
03-09	山畫眉	alin yadali cecike			○	
03-10	燕雀	cibirgan			○	
03-11	白花雀	šahaltu			▲	sahaltu cecike
03-12	山花雀	alhatu cecike			○	
03-13	金雀	aidana			□	黃鸝:hūwangdana 相思鳥(侶鳳迷:ekidun cecike)
03-14	侶鳳迷	kidun cecike			△	
03-15	南相思鳥	julergingge kidun cecike				
03-16	粉眼	jinjiba		△	○	
03-17	金眼	aisuri			○	
03-18	喇叭嘴	enggetu cecike			△	喇叭嘴

03-19	槐串	fenehe cecike		△	○	
03-20	金鈴	honggon cecike		△	○	
03-21	白頭金鈴	cakūlu			▲	cakūlu honggon cecike
03-22	太平雀	taifintu cecike			○	
03-23	太平雀	taifintu cecike			○	
03-24	珠頂紅	calihūn	△	△	△	朱頂紅
03-25	花紅燕	fulgiyan cibirgan			○	
03-26	花黃燕	suwayan cibirgan			△	黃花燕
03-27	山花燕	alin cibirgan			○	
03-28	南百舌	juleringge kūbulin mudangga cecike			補○	
03-29	北百舌	amargingge kūbulin ilenggu cecike			▲	amargingge kūbulin mudangga cecike
03-30	雌北百舌	amargingge emile kūbulin ilenggu cecike				
04-01	藍靛類	lamuke			○	
04-02	黑靛類	yacike			○	
04-03	紅靛類	fulgike			○	
04-04	白靛類	šeyeke			○	
04-05	靠山紅	fulgiyan sišargan			○	
04-06	金絲麻鷄	suwayan sišargan			△	金絲料
04-07	黃鸝	galin cecike	▲	▲	△	倉庚(鸝黃: gūlin cecike)
04-08	鶯雛	deberen gūlin cecike	*	*	○	
04-09	蛇頭鳥	meihe cecike		△	○	
04-10	白頭翁	cakūlutu cecike			○	
04-11	白頭郎	cakūlu cecike			○	
04-12	雙喜	jurguntu cecike			○	
04-13	吉祥鳥	sabirgan cecike			○	
04-14	五更鳴	yadan cecike		△	○	
04-15	西寧白	šānyan sišargan			△	
04-16	偷倉	jeleme cecike		△	○	
04-17	長春花鳥	niyengniyeltu cecike			○	
04-18	嘉雀	fiyasha cecike	△	△	△	家雀
04-19	白嘉雀	šānyan fiyasha cecike	*	*	補△	白家雀
04-20	花嘉雀	alha fiyasha cecike	*	*		
04-21	黃雀	suwayan cecike			補○	
04-22	山雀	alin i cecike			○	
04-23	鶉鴒	mušu	○	○	○	
04-24	北牛鶉	amargingge ihan mušu	*	*	補○	
04-25	南牛鶉	juleringge ihan mušu	*	*	補○	
04-26	白翎	hoihon				
04-27	阿蘭	wenderhen	▲	△	○	
04-28	米色阿蘭	suhun wenderhen	*		△	灰色阿蘭
04-29	鳳頭阿蘭	saman cecike	△	△	○	
04-30	鳳頭花阿蘭	alha saman cecike	*	*	○	
○: 漢語名・滿洲語名とも一致 △: 漢語名が異なる ▲: 滿洲語名が異なる □: 『鳥譜』に見える別名のみ採録 *: 形容のない総称のみ採録(増訂清文鑑等については特に示さず) 補: 増訂清文鑑にはなく清文補彙に採録						『鳥譜』と異なる場合のみ 注記